

【論文】

システム理論は社会学的でありうるか

赤堀 三郎*

システム理論は社会学的でありうるか。この問いに答えるために、本論文では社会システム (social systems) という社会学の専門用語の検討から出発する。検討にあたっては、まず、社会 (society) と「社会的なもの」 (the social) との違いをはっきりさせる。そうすれば、社会システムは「社会的なもの」のシステムであって、「社会」のシステムとは限らないということがわかる。次に、「社会的なもの」と「システム」が何を指すかについて考える。社会システムという言葉は、しばしば近代官僚制のイメージとともに用いられている。だがシステムという言葉がそもそも意味するところは「多様なものにおける統一」 (*unitas multiplex*) であって、これは社会学の伝統において「社会的なもの」という言葉に込められた意味にひじょうに近い。さらに言えば、「社会的なもの」は社会学の対象そのものも意味する。このことから、少なくとも、社会システムという語は社会学的な観点から理解しようと言える。続いて、社会学的なシステム理論に関して議論する。「社会学的」という形容詞には、社会学において追究されてきた特有の「ものの見方」が含意されている。その「ものの見方」とは、手短かに言えば「別様に考える」ということであるが、システム理論の文献においても同様のことが主張されている。以上のことから、システム理論は社会学的でありうる結論づけることができる。

キーワード: システム理論, 社会システム, 社会学的想像力

1 問題の所在

社会システム理論は、社会学理論 (sociological theory) として有意義であろうか。また、現代社会を観察・記述するための道具である社会理論 (theory of society) として有意義であろうか。この是非を見極めたい。また、有意義であるとするれば、どのように役立てられるのかを明確化したい。こういった比較的大きな目標に向かう前段階として、ここでは、社会システム理論とは何を指すのかを——あるいは社会システム理論という曖昧な言葉を今後どのように精確に規定し、どのように用いていけばよいのかを——社会学の立場から展望する。このことが、本論文の目標である。

社会システム理論は、社会学の歴史の中で、イデオロギー的な対立を背景として、社会システム理論に与しない立場の人々から激しい非難を被ってきた。非難の方向性はだまかに言って二つ

* 本学現代教養学部准教授

ある。一つ目は「保守的」というものである。社会システム理論は、社会システム全体の維持のために個人の人々の自由や自発性の抑圧も辞さない、きわめて反動的な内容をもっている、等々といった具合にである。二つ目は「不必要に難解」というものである。社会システム理論を扱う著作に見られるきわめて難解で日常言語からかけ離れた言葉づかいは、人々の現実の暮らしを反映していない空理空論である、等々。これら二つの方向性の正否はさておき、ひとまず、いずれもシステムという言葉のもつ語感と密接に関連するものと言えるだろう。システムという言葉はテクノロジーと結びつきがちであることから、社会システム理論は「工学的」であると考えられる者は少なからず存在する。「工学的」であることが非難に値するかどうか、あるいは誰にとって非難に値するかといったことは別として、たしかに「工学的な」社会システム理論は存在する。だが、だからといって、すべての社会システム理論が「工学的」だとは限らない。少なくとも、社会学が社会システム理論という言葉を用いる限りで、この理論が「工学的」でなく「社会学的」でもありうるのではないかと問う余地はあるだろう。こういった事情を踏まえ、本論文では「社会システム理論は社会学的でありうるか」という問いを立てる。

この問いに答えるには、これまでの社会学で社会システム理論という言葉で名指されてきたものを厳密に規定する必要がある。というのも、少なくとも日本では、社会学における社会システム理論という言葉の意味内容が多義的であり続けているからだ。社会システム理論は、「社会システム」+「理論」という意味でも、「社会(的)」+「システム理論」という意味でも用いられている。ここでは社会システム理論という言葉の後者の意味に限定して捉えたい。こちらの社会システム理論という言葉の用法は、英語で言う“social systems theory”に対応する。“social systems theory”は、科学の一部門としての社会科学(social science)と同様、一般システム理論(general systems theory)の一部門として社会(the social)を対象とするシステム理論を指す。だがこのように、社会システム理論を一般システム理論の一部門とみなしたとしても、先ほど触れたように、この意味での社会システム理論を「社会学的システム理論」と呼んでいいのかどうか、言い換えれば、この理論は果たして「社会学的な」理論たりえているのだろうかという疑問は依然として残る。

以下ではこの疑問を払拭するために、次のような手順で論を進める。まず、社会学の専門用語としての社会システムという言葉(特に日本語の語彙としての社会システム)が何を指すのかを明確化する。次に、一般システム理論はどのような形で社会学の対象と結びつきうるかを概観する。最後に、社会学の伝統において「社会学的」という形容詞に込められた「ものの見方」を浮き彫りにし、それと一般システム理論特有の「ものの見方」とを照らし合わせることによって、「システム理論は社会学的でありうるか」という問いに答えを出す。

本論文で行おうとしている上記のような作業は、重箱の隅をつつくような些末なことだと思われるかもしれない。だがこれまでの社会学の世界、とりわけ日本の社会学の世界では、社会システムや社会システム理論といった言葉があやふやな基盤の上で議論されてきたせいで、無用で無益な言説が数多く生み出され続けてきた。こういった泥濘から抜け出すためには、考察の出発点をはっきりさせようとする研究が、今のところは、やむを得ず重要なものとなるに違いない。本論文もまた、そのような足場固めの試みに連なろうとするものである。

2 社会システム理論を捉えなおす

2.1 そもそも「社会システム理論」なのか？

日本の社会学の文脈では、社会システム理論という言葉はおもに、タルコット・パーソンズやニクラス・ルーマンといった著名な理論家の名とともに用いられている。すなわち社会システム理論とは、パーソンズの理論体系やルーマンの理論体系、あるいはいずれかの理論の流れを汲んだ学派の理論体系を指すものとして使われている言葉だと言ってよい。だが、パーソンズやルーマンの理論体系は果たして社会システム理論なのだろうか。あるいは社会システム理論というラベルで言い尽くせるものなのだろうか。

こういった疑問を解消するために、まずは単純に、彼らの主要な著作の翻訳書の題名を点検するところから始めたい。

パーソンズの理論体系を社会システム理論と呼ぶ根拠のひとつとして、彼が1951年に大著 *The Social System* を世に問うていることが挙げられるだろう。この本は佐藤勉によって日本語に翻訳され、1974年に『社会体系論』という題名で出版されている。体系は system の訳語だから、この邦題は『社会システム論』に等しいとみなして差し支えない。*The Social System* を『社会システム論』と訳すのは、たとえば *Das Kapital* を『資本』ではなく『資本論』と訳したり、*Le Suicide* を『自殺』ではなく『自殺論』と訳したりすると同様であると見れば、間違いではない。こう考えれば、『社会システム論』(『社会体系論』)という表題は、社会システムという言葉が何を指すかは別として、とにかく社会システムなるものについて論じている著作だということを示している。だが *The Social System* というタイトルは、そのまま訳せば「社会システム」なのであって、「理論」という言葉は含まれていない。つまり、このタイトルは決して social systems theory やシステム理論を意味しているものではないのである。

他方、ルーマンの理論体系を社会システム理論と呼ぶことに関しては、どういうことが言えるだろうか。ルーマン自身が自らの理論体系を名づける際に、社会システム理論ではなく「社会の理論」という言葉を選んできたこと (Luhmann 1997=2009: v) に関しては、ここではひとまず問わないでおく。ルーマンが1984年に出した大著 *Soziale Systeme* は、1990年代初頭、佐藤勉らによって『社会システム理論』という題名で邦訳されている。こちらはパーソンズの *The Social System* とやや事情が異なる。ルーマンの *Soziale Systeme* には副題として *Grundriß einer allgemeinen Theorie* (一般理論提要) という言葉が添えられている。タイトルだけで言えば、この表題が指すものは「社会システムの一般理論」であると言ってよい。副題に理論という言葉が含まれているところから言えば、この原書タイトルを『社会システム理論』と訳しても間違っていない。だがこの邦題は、「社会システム(複数形)・の・理論」という意味での社会システム理論であって、「社会(的) + システム理論」としての社会システム理論 (social systems theory) ではない。

つまり、パーソンズの *The Social System* にせよ、ルーマンの *Soziale Systeme* にせよ、いずれのタイトルも「社会システム」もしくは「社会システム・論」を指しているのであって、「社会システム理論」や「システム理論」ではないのである¹⁾。もちろん、著作のタイトルだけで両者の理論を社会システム理論と呼べるか呼べないかを確定することはできない。だがここで示し

たいのは、日本語の文脈において「社会システム論」や「社会システム理論」といった言葉が一人歩きし、特にその意味内容を厳しく問われることなく使われてしまっているということである。ひとまず、この目論見は達成できたと言えるだろう。

2.2 社会システムは社会のシステムか？

ではパーソンズやルーマンや、その他の論者たちが用いる社会システムという語は、いったい何を指しているのだろうか。

社会システムという言葉は今や日本語の語彙として定着しており、社会学という専門分野と関係なく広く用いられている。社会学の用語としての社会システムという言葉も、一般的な用法に引きずられて受け止められているきらいがあるが、社会学にとっては学術用語として扱うべき語であり、もっと精確に規定されてしかるべきである。

むしろパーソンズもルーマンも、彼らの著作の中で社会システムという語を厳密に定義している。先ほどは「精確に規定するべき」とは述べたが、ここでは社会システムという言葉に関する思い込みを払拭することができればよいので、ひとまず詳細な定義に立ち入ることはせず、社会システムという言葉それ自体の検討だけを行うこととする。

社会システムはしばしば、社会 (society) のシステムと思われている。社会はひとつのシステムとして、転変する環境の中で自らを維持し、存続していかなければならず、そのために一定の機能を満たしたり、さまざまな問題を解決したりしなければならない、等々。社会システムという言葉は、こういった単純化されたイメージで捉えられ続けてきた。あるいはユルゲン・ハーバーマスが『コミュニケーション的行為の理論』で論じた「システム」——「生活世界」と対置される——のような、いわば目的合理的な、近代官僚制のイメージと重なる社会システムの捉え方もまた、社会学の世界には広く行きわたっている。ところが、パーソンズやルーマンの著作を一瞥でもすればすぐにわかることではあるのだが、術語としての社会システムの意味内容はこういった紋切型の表象とぴったり重なり合うものではない。

すでに確認したとおり、社会学の専門用語としての社会システムは、英語で表記すれば social system である。強調しておきたいのは、この social system という術語が、必ずしも社会 (society) のシステムを意味するとは限らないということである。すなわち、社会システム (social system) は、社会 (society) のシステムである以前に、「社会的なもの」(the social) のシステムなのだ²⁾。

とりわけルーマンの理論体系においては、「社会的なもの」のシステムと「社会」のシステムとの相違は明らかだ。社会 (Gesellschaft) のシステムは社会システム (Sozialsystem) の一類型である。この違いを出すために、日本のルーマン翻訳においてはしばしば、Gesellschaft は社会ではなく「全体社会」と、Gesellschaftssystem は「全体社会システム」と訳されてきている³⁾。ルーマンの理論体系における社会システムには、全体社会のほかに、相互行為＝相互作用 (Interaktion) と組織 (Organisation) という類型があり、後に抗議運動が第4の類型として付け加えられている。先ほど挙げた 1984 年の *Soziale Systeme* はこの意味での「社会システム (複数形) の理論」を扱う著作であり、「社会」というシステム (単数形) についての著作ではない。

社会システムという術語を用いる社会学者はルーマンだけではないが、ルーマンにせよその他

の論者にせよ、社会学における術語としての社会システム (social system) は、何よりもまず「社会的なもの」(the social) のシステムなのであって、社会 (society) のシステムとは限らないのである。

2.3 社会学固有の対象としての「社会的なもの」

社会システム (social system) は「社会的なもの」(the social) のシステムであると述べた。だがそれが何からなるシステムであるか、どのようなタイプのシステムであるかについては、論者によって見解が異なる。たとえば、(年代によって言うことが多少変わるが) パーソンズであれば社会システムは相互行為のシステムであり、ルーマンであれば社会システムはコミュニケーションのシステムであるといったように、両者における社会システムという術語の規定のされ方だけを見ても、そこには明確な違いがある。とは言え、本論文で立てた問題からすれば、こういった違いにまで立ち入る必要はないので、ここでは暫定的に、社会システムは「社会的なもの」のシステムである、とだけ規定しておく。

このように捉えたとき、まず問題となるのが「社会的なもの」とは何かということである。近年、「社会的なもの」が何を指すのかということに関する議論が盛んに行われるようになってきている。ここでは social system の social を、社会学固有の対象を意味する「社会的なもの」(the social) の文脈で捉えたい。この意味での「社会的なもの」が何を指すかについても、論者によって見解はさまざまに異なる。古典理論家の学説について言えば、マックス・ヴェーバーであれば社会学固有の対象は「社会的行為」(soziale Handlung) であり、エミール・デュルケームであれば社会学固有の対象は個々人に外在しこれを拘束する「社会的事実」(fait social) である⁴⁾。そしてルーマンにおいては、社会学固有の対象は社会システムだということになる⁵⁾。ルーマンが「社会的なもの」という言葉に込めた考えについては、上記 *Soziale Systeme* や、論文「社会秩序はいかにして可能となるか」⁶⁾ に詳しく書かれている。その考えを手短かにまとめると、「社会的」(social) というのは、自我と他我とで観点の違いがあって、あるいは違いがあるにもかかわらず、そのあいだに何らかの秩序ないし「まとまり」が生じているさまを指す言葉である、ということになる。ここから派生して、多種多様な人々が仲良くするだとか、互いに助け合って困っている人を助ける仕組みをつくるだとかといった social のより一般的な意味が生まれてくる。いずれにしても、社会学者の数だけ社会学があるつつねづね言われる中で、古典理論家の学説から今日の学説までさまざまな見解が示されている「社会学の対象」に共通して見られるものを一言で表す象徴として、「社会的なもの」という言葉を用いることができるのである。

2.4 「社会的なもの」のシステムとは？

以上の議論を踏まえ、「社会的なもの」とシステムとの結びつきという側面から、社会システムという言葉について検討を進めていく。

システムという語を厳密に定義することは難しい。というのも、システム概念にはさまざまな変種があるからである。そこで、まずは語源を訪ねてみよう。そうすると、システム (system) という語は、「ともに」「一緒に」(together) を意味するギリシア語の接頭辞 “syn-” と、「置く」を意味するギリシア語 “histanai” から成り立っていることがわかる。つまりシステムという語は、

語源から言えば、散り散りバラバラなものを「併存させる」(cause to stand together) または「併置させる」(cause to put together) といったことを意味し、無秩序や混沌と対置される秩序だった状態を言い表すものなのである (Bowler 1981=1983: 2)。これを要して言えば、システムという言葉がそもそも指し示すところは「多様なものにおける統一」(*unitas multiplex*) だということになるだろう。これは先ほど確認した、社会学の伝統において「社会的なもの」という言葉に込められた意味にひじょうに近い。

「社会的なもの」は多種多様な異質な人々のあいだに生じる秩序のことで、システムは「多様なものの統一」のこと。つまり言葉の意味からすれば、「社会的なもの」こそ、システムと呼ぶにふさわしい。社会システムとは、転変する環境の中で存続する何ものかや、物事を大規模かつ合理的に推進する制度的仕組みといったことを意味する以前に、「多様なものの統一」という意味でのシステムなのである。

すでに述べたように、「社会的なもの」という言葉は社会学固有の対象を象徴するものとして捉えうる。このことから、「社会的なもの」のシステムとしての社会システム (social system) という語は、論者による相違はさておき、少なくとも、社会学という専門分野の対象になりうるとは言えるだろう。

社会システムという言葉が社会学の対象でありうるとして、次に検討に付したいのは、システム理論と社会学との関連である。というのは、一般システム理論の一部門としての社会システム理論は、「社会学的」ではないのではないか (たとえば、「工学的」なのではないか) という疑念につねに晒されているからである。システム理論は、社会学の対象 («社会的なもの») を扱おうとしても、それは果たして「社会学的」な扱い方でありうるのか。引き続き、この点に関して考察する。

3 社会学的システム理論——社会学の観点とシステム理論の観点

3.1 「社会学的」であること

「社会学的」(sociological) とはどのようなことを指しているのだろうか。細かく見れば、社会学固有の対象としての「社会的なもの」と同様、多種多様かつ多数の論者がそれぞれに異なる答えを出しているのが、精密な定式化は難しい。やはりここでも「社会学者の数だけ社会学がある」というわけである。だがここでも、それぞれに異なる社会学者の見解の中に、何らかの共通した特徴を見出すことはできるだろう。ここでは、「社会学的」という形容詞を、社会学というディシプリンを特徴づける特定の「ものの見方」を言い表すものとして捉える。それは手短かに言えば「人間の世界を見るための非常に特殊な方法」(Berger and Kellner 1981=1987: 25) だということになるだろう。

ではどのように「非常に特殊」なのか。この部分の内容は細かく見れば論者によってそれぞれに異なるが、共通部分だけ取り出して簡潔に言えば、それは「別様に見る」ということに尽きる。社会学の古典理論家たちは、別様に見ることとしての「社会学的な」ものの見方を執拗に追い求めた結果、古典理論家と称されるに至った。そして今もなお、「社会学的」とはいかなる「ものの見方」であるかに関する準拠点であり続けている。チャールズ・ライト・ミルズにおいては、

社会学的想像力 (sociological imagination) という言葉で「社会学的」であるための条件が問われており、古典理論家たちの著作が「社会学的」のお手本とされる一方で、パーソンズの展開する難解で高度に抽象的な理論は「誇大理論 (grand theory)」であって、そこには社会学的想像力が欠けているとされていた (Mills 1959=1995)。

では、社会システム理論は「社会学的」だろうか。パーソンズの理論は、ミルズによって、また後世のラディカル社会学者たちによって、「社会学的」という言葉の表す精神の対極にあるものとされた。また、いわゆるハーバーマースルーマン論争では、システム理論の「工学的」側面が争点となっていた (Habermas und Luhmann 1971)。こういった表面的なことが広く知れ渡っていることを鑑みれば、社会システム理論は「社会学的」とは言えない、との先入観が根強く浸透しているのも無理はない。だがパーソンズにせよルーマンにせよ、「社会学的」であろうとしていなかったかという、むしろ逆であって、両者ともそれぞれ「社会学的」という言葉の重みを十分に理解し、「別様に見る」というミッションをそれぞれのやり方で遂行しようとしていたのではないか⁷⁾。

いよいよ核心に近づいてきた。問題となるのは、パーソンズにせよルーマンにせよ、あるいはその他の論者にせよ、システム理論が「社会学的に」見るための有用なツールとなるのか、それとも障害物となるのかということである。以下では、システム理論の考え方を概観することで、この問いに答えを出す。

3.2 システム理論の考え方

システムという言葉の歴史は古い。だが日本語の文脈では、システムという言葉の歴史は浅い。テクノロジーの方面の語彙としてシステムというカタカナ表記が定着し、そこからその他の分野へと波及していった経緯から、システムという外来語は人工的・テクノロジー的な響きを持っている。他方、社会学におけるシステム理論は、社会学の「外部」から社会学へと導入されたものだという見解もまた支配的である。社会学の「外部」であるというなら、それは「社会学的」ではないだろう。だが実際のところはどうかののだろうか。システム理論と呼びうるパラダイムがあるとして、それは果たしてどのような考え方に基づいているのだろうか。

一般システム理論 (general systems theory) という言葉は、狭い意味では、生物学者ルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィが主導した学問上の運動において掲げられた看板である。この運動は、特定の学問による他のディシプリンの侵攻を意味するものではない。むしろ反対に、ディシプリンの垣根を越えた、システムの一般的性質を扱おうという企図を表している。すなわち、システム理論それ自体は、物理学や生物学など、特定のディシプリンによって代表されるものではない。

ではシステム理論は、学問分野の垣根を越えることで何をしようとしているのか。

システム理論と一口に言っても、多種多様なシステム概念があるため、厳密に定義するのは難しい。だが、一般システム理論を扱う多くの文献に共通して見られる傾向はある。すなわち、システム理論は、第一に、システムを「もの」ではなく「ものの見方」として捉えているということである。たとえば次のとおり：

「システムとは、ものではなく、変数のリストを意味する」(Ashby 1956=1967: 48)

「システムとは、観察のための準拠枠そのものである」(Pask 1961: 23)

「システムとは、物の見方である」(Weinberg 1975=1979: 70-1)

すなわち、システム理論において強調されているのは「システムはどのようなものか」といったことではない。「対象をどのように見るか」である。それゆえにシステム概念は「ものの見方」だとみなされているのである。これはすなわち、「ものの見方」が変われば対象が違って見えてくることを意味する。学問分野の垣根を越え、対象を「システム」として捉えることで目指されているのは、このような意味での「認識利得の獲得」である。すなわち、システム理論の特徴は、見方を変えることによって、今ある秩序とは異なる、別の可能性を発見しようとする、そのような考え方にこそある。これは、物事の認識のあり方が絶対的なものではなく相対的なものであるということから出発しようとする立場であり、「相対的思考法」とも言える。

すでに述べたように、社会学の伝統において「社会学的」という形容詞に込められた志向は「別様に見ること」であった。これは、上記で見たような、一般システム理論が重視する「相対的思考法」と軌を一にしている。このことから、システム理論は「社会学的に」物事を捉えるための道具でありうるという帰結を導くことができる。

3.3 社会学的システム理論

社会システム理論という言葉は、社会システムの理論(社会システム+理論)と、「社会的なもの」(the social)を扱うシステム理論(一般システム理論の一部門としての社会システム理論)という二通りの受け取り方が可能であり、この点だけから言っても多義的である。かりに社会システム理論という言葉の後者の意味で受け取るにしても、それは社会学的なものであるとは限らない(工学的な social systems theory というものもありうる)。

したがって、パーソンズやルーマンや、その他の論者の理論体系を指すものとしては、社会システム理論という言葉よりは社会学的システム理論(sociological systems theory)という言葉を用いるほうが適切であると言える。ルーマンもパーソンズの理論体系を指して社会学的システム理論(soziologische Systemtheorie)という言葉を用いているが(Luhmann 2002: 12)、ここでは、ただ単に社会学者が扱っているシステム理論ということだけをもって社会学的システム理論という言葉を用いるべきだと言いたいわけではない。この言葉は、社会学の伝統において「社会学的」(sociological)という言葉に込められた、「別様に見る」というミッションを背負ってもいるのである。

社会学的システム理論という言葉に関して、もう一点指摘しておきたいことがある。それは、この言葉が、社会学の立場からの一般システム理論への貢献可能性をも含意しているということである。社会システム理論は、社会学の外部の学問分野の知見(物理学、生物学、情報科学など)を、社会学の内部へと導入したものとみなされている。だが、一般システム理論に「一般」という言葉が含まれている以上、それは特定の学問分野において得られた知見を「一般化」したものを、他の学問分野に適用しているということになる。そうであれば、システム理論から社会学へという一方通行的な流れだけでなく、社会学において生まれた知見を一般化し、システム一般

の理論へと活かしていくような研究の方向もありうるのではないか。少なくとも、一般システム理論である以上、social systems の理論もそこに含まれなければ「一般」システム理論とは言えない。social systems の社会学的研究から他の学問分野に影響を与えるようなシステム理論が生まれるとは現状では考えにくいかもしれないが、とにかくにも、社会学的システム理論という言葉の下では、そういった、いわば輸入過剰の状態を逆転させるような方向性の研究も模索されてしかるべきだということは強調しておきたい。

4 結論と展望

本論文では、システム理論は「社会学的」でありうるかどうかを問うた。答えは「ありうる」である。

本論文のこれまでの議論を踏まえると、システム理論が社会学的でありうる理由は大きく分けて二つある。一つ目は、システムの語源「バラバラなものを一緒にする」が、そっくりそのまま、社会学の対象たる「社会的なもの」(the social) という言葉の意味に等しいこと。二つ目は、一般システム理論が説く「認識の相対性」や「今ある秩序とは異なる、その他の可能性の発見」といったものが、そっくりそのまま、社会学の伝統において「社会学的」という言葉に込められた考え方と重なり合っていること。

「社会学的な」システム理論がありうるとしても、それが実現しているかどうかはまた別の話である。だが社会学とシステム概念の結びつきの軌跡をたどることによって、社会学が社会学的であろうとするために、社会学の対象たる「社会的なもの」をシステムという考え方において捉えようとする試みが、どれだけ真摯に行われてきたかを明らかにすることができるだろう。そしてそのような作業の行き着く先にこそ、冒頭で述べたような、社会学理論 (sociological theory) としての、また現代社会を観察・記述するための道具である社会理論 (theory of society) としての社会学的システム理論の発展形が見えてくるのではないだろうか。

[注]

- 1) この他に、社会学者ウォルター・バックレイの『一般社会システム論』という邦題の本がある (Buckley 1967=1980)。この本の原題は *Sociology and Modern Systems Theory* であるが、直訳すれば『社会学と現代システム理論』であって、やはり「社会システム論」や「社会システム理論」ではない。
- 2) このことについてはすでに、赤堀 (2008) において論じた。
- 3) ルーマンの著作の英訳版などではしばしば、ドイツ語の Gesellschaftssystem に対して societal system という訳語が当てられている。
- 4) もう一人の著名な古典理論家ゲオルク・ジンメルに関しては、社会学固有の対象としての「社会的なもの」を論じる際に sozial よりは gesellschaftlich という言葉のほうを好んでいるように思われる。だが、これも日本語にしてみれば「社会的なもの」である。
- 5) これについては Luhmann (1967b) を参照。
- 6) 論文集『社会構造とゼマンティック』第2巻 (Luhmann 1981=2013) 所収。

- 7) ルーマンの場合、「社会的」を目指すというミッションを追究する際のキーワードは「社会的啓蒙」である (Luhmann 1967a).

[文献]

- 赤堀三郎, 2008, 「社会の社会学的再記述」『東京女子大学社会学会紀要』36: 19-35.
- Ashby, William Ross, 1956, *An Introduction to Cybernetics*, London: Chapman & Hall. (= 1967, 篠崎武・山崎英三・銀林浩訳『サイバネティクス入門』宇野書店.)
- Berger, Peter L. and Hansfried Kellner, 1981, *Sociology Reinterpreted: An Essay on Method and Vocation*, Doubleday, Garden City, New York: Anchor Press. (= 1987, 森下伸也訳『社会学再考——方法としての解釈』新曜社.)
- Bertalanffy, Ludwig von, 1968, *General System Theory*, New York: George Braziller. (= 1973, 長野敬・太田邦昌訳『一般システム理論』みすず書房.)
- Bowler, T. Downing, 1981, *General Systems Thinking: Its Scope and Applicability*, Elsevier North Holland. (= 1983, 中野文平訳『応用一般システム思考』紀伊國屋書店.)
- Buckley, Walter, 1967, *Sociology and Modern Systems Theory*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. (= 1980, 新睦人・中野秀一郎訳『一般社会システム論』誠信書房.)
- Habermas, Jürgen und Niklas Luhmann, 1971, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1987[部分訳], 佐藤嘉一他訳『批判理論と社会システム理論』木鐸社.)
- Luhmann, Niklas, 1967a, "Soziologische Aufklärung", *Soziale Welt*, 18: 97-123. Reprinted in: Niklas Luhmann, 1970, *Soziologische Aufklärung*, Band 1, Opladen: Westdeutscher Verlag, 83-115.
- , 1967b, "Soziologie als Theorie sozialer Systeme", *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 19: 615-44. Reprinted in: Niklas Luhmann, 1970, *Soziologische Aufklärung*, Band 1, Opladen: Westdeutscher Verlag, 143-72.
- , 1981, *Gesellschaftsstruktur und Semantik*, Band 2, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2013, 馬場靖雄・赤堀三郎・毛利康俊・山名淳訳『社会構造とゼマンティック』[第2巻], 法政大学出版局.)
- , 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1993-1995, 佐藤勉監訳『社会システム理論』恒星社厚生閣.)
- , 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2009, 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会』法政大学出版局.)
- , Dirk Baecker (Hrsg.), 2002, *Einführung in die Systemtheorie*, Heidelberg: Carl-Auer-Systeme Verlag.
- Mills, Charles Wright, 1959, *The Sociological Imagination*, Oxford: Oxford University Press. (= 1995, 鈴木広訳『社会学的想像力』[新装版] 紀伊國屋書店.)
- Parsons, Talcott, 1951, *The Social System*, New York: The Free Press. (= 1974, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店.)
- Pask, Gordon, 1961, *An Approach to Cybernetics*, London: Hutchinson.

Weinberg, Gerald Marvin, 1975, *An Introduction to General Systems Thinking*, New York: John Wiley & Sons. (= 1979, 松田武彦監訳・増田伸爾訳『一般システム思考入門』紀伊國屋書店.)

Can Systems Theory Be Sociological?

AKAHORI, Saburo

This paper asks whether systems theory can be sociological. To answer this question, the paper begins with a review of the technical definition of “social system” within the domain of sociology. First, I argue that “society” and “the social” must be distinguished from each other to understand that the term social system refers to systems of “the social” rather than to the system of society. Second, I examine the phenomena to which the words social and system refer. Whereas social system frequently refers to a modern bureaucracy, the term system originally implied the integration of diverse elements (*unitas multiplex*), which carries a connotation similar to that of “the social” within the tradition of sociology. Additionally, the social also refers to a particular sociological object of study. Thus, it is clear that the notion of a social system can be understood from a sociological perspective, which enables us to examine sociological systems theory. The adjective “sociological” implies a distinctive way of thinking associated with sociology. Briefly, it is “to think otherwise.” This way of thinking can also be found in the systems theory literature. Based on the foregoing, this paper concludes that systems theory can be sociological.

Keywords: systems theory, social system, sociological imagination